

形容詞語彙の語構成と通時的構造

——蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』による研究の共有——

安部清哉

キーワード…語構成史、形容詞、通時的構造、形成過程、蜂矢真郷

要旨…本稿は、形容詞語彙の語構成（史）の研究をいっそう進めていくために、現時点での基本的研究成果を共有することを意図したもので、現在、先行研究を十分包含していて、形容詞語彙の語構成（史）に関してもしっかりと精密であると考えられる蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』を資料として、その解釈を図・表にて「見える化」、視覚化して、より把握しやすくすることを意図して編んだものである。当該書で解釈されている形容詞の、主に古代語（上代・中古・中世）を中心とした語構成、語形成およびその通時的構造、つまり広義での語構成の古代語の構造と史的体系とを、図解的に把握しようとしたものである。

簡略に言えば、『図解』蜂矢形容詞語構成、『図・表で分かる『古代語形容詞の研究』』であり、形容詞語構成（史）の補助的資料とも言える。なお、拙稿・安部清哉（2017.8）「書評」蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』（『萬葉』224）の補足的意味をもつもので、そこで紙幅の都合上割愛した部分を記したところを含む。^{（注）}

一 はじめに

語彙史の研究は、意味、形態、語種、語構成、文法機能、文字、位相、文体、文化、計量的分析方法、意味体系的分析方法（まとめりとしての意味的分類・シソーラス研究）などの諸観点から研究が進められてきている。この中で通時的研究としては、語種、および、いわゆる計量的分析方法から研究は、比較的進んでいるが、その他については、一部あるいはいくつかの共時態での説明は進んでいても、通時的レベルでの歴史的研究までは至っていないものが多い、というのが現状と言えようか。

そのような中であって、近年、語構成の通時的概要すなわち語構成史が、形容詞という一品詞、また、広義の古代語に限定されたものであるが、かなり高いレベルではほぼ全体像に近い姿まで説明されるような段階に至った。

蜂矢真郷氏の形容詞の一連の語構成研究が、『古代語形容詞の研究』（以下、本書とも称す）としてまとめられたからである。

そこで、本稿では、この形容詞語彙の語構成（史）に関して研究をいっそう進めていくために、現時点でもっとも詳細であると考えられる蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』を、基本的研究基盤として共有することを意図して、編んだものである。

蜂矢氏の本書は、研究史や現時点での先行研究とその成果を十分包含している点でも優れている。そこでの解釈を図・表にて「見える化」、視覚化して、より把握しやすくすることを考えてみたものである。それらと解説とによって、当該書で解釈されている形容詞の、主に古代語（上代・中古・中世）を中心とした語構成、語形成、および、そ

の通時的構造、つまり広義での語構成の古代共時態の構造と史的体系とを、いわば図式的、図解的に把握しようとしたものである。簡略に言えば、『図解』蜂矢形容詞語構成『図・表で分かる『古代語形容詞の研究』』とでも言おうか。なお、拙稿・安部清哉(2017.8)「書評」蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』(『萬葉』224)の補足的意味をもつもので、そこで紙幅の都合上割愛した部分を記したところを含む。^(注1)

二 語構成研究とおよび蜂矢真郷氏の『古代語形容詞の研究』の構成

二―一 語構成の通時的研究と形容詞の語構成史

本稿執筆者は、かつて語構成史を、編者として『語彙史』(2009、シリーズ日本語史2、岩波書店)の一章に構想してみたが、それを「史」として編むことの難しさも学んだ。様々な性質の語彙の語構成を一度に把握しようとすることは容易ではない。

それならば、と品詞を名詞に限定し、「名詞」というジャンルでの与えられた原稿ではあったが、「名詞の変遷」(安部(2014))という語彙史研究の中で、語構成史(名詞の)も含めて記述を試みた。しかし理論的に切込む諸観点までは試作として描けても、名詞全体では語数が膨大であるだけでなく、特徴も多種多様なため、実証的に裏付けるだけの蓄えも時間もなかった。

動詞の語構成史も、古代の形態派生の分野での研究はかなり進んできているが、活用、自他、意味が形態と深く関

わかることもあって、全容解明には至っていない。

その点、語数も多くはなく、形態や意味、および、計量的研究や意味分類などにおいても、一定の成果がすでに積み上げられてきている「形容詞」については、語構成の歴史的全体像を描き出せる直前までは、研究が成熟してきていると言えようか。

そのような中で、公刊された本書は、形容詞という一品詞全体の語構成（史）を初めてこの水準まで解明した注目すべき一書であると思われる。

形容詞は、特に形態や計量的観点からの語彙史研究は、村田菜穂子氏の一連の研究によってかなり勢力的に解明されてきている語彙（品詞）でもあった（村田氏は、蜂矢氏の教え子でもある）。その意味でも、形容詞については、その蜂矢氏による語構成史の解明も加わったことによって、総体的な語彙史としての全体像がかなり把握できる段階になりつつある、ということが出来よう。

その総論篇で示された共時的分類（総論篇第一章第四説）と形容詞語幹の通時的構造（同篇第一章第二節）がその研究の到達点の中核をなしている。それらは本書各論篇、さらに論者（以下、本書著者を指す）の先行する二書による緻密な実証の裏付けによって、論理的に構築されている。

二―二 『古代語形容詞の研究』の構成

本書は、語構成論の研究を最も総合的に推し進めてきた蜂矢氏が、特に形容詞に関する成果を一書にまとめたものである。形容詞の語構成の研究でも特に古代語（上代・中古・中世）の資料を中心にまとめているので、「古代日本

語形容詞の語構成(史)研究」とも言える。古代語・近代語という2分類における古代語が、資料的精密さから言えば主たる対象であるが、近世・近代・現代における語形まで調査と考察は及んでいる。

特に本書で注目したい点の一つは、形容詞語彙の語構成のスタティックな構造の面だけでなく、その通時的変遷や形容詞語形の語形成にも深く踏み込んでいる点にある。

本書は、総論篇(2章)および各論篇(4章)からなるが、全体が把握しやすいように、目次を再掲しておく。

はしがき

総論篇

第一章 形容詞の活用等と語構成

第一節 形容詞の活用表 第二節 形容詞語幹の用法 第三節 ク活用形容詞とシク活用形容詞との意味的

差異 第四節 語構成から見た上代の形容詞

第二章 特徴のある形容詞群

第一節 両活用形容詞 第二節 重複形容詞・並列形容詞 第三節 ナシ型形容詞 第四節 タシ型形容

詞 第五節 ケシ型形容詞 第六節 ツ型形容詞 第七節 名詞(・数詞)・動詞連用形・副詞(・感動

詞) ナシの派生形容詞 第八節 動詞被覆形ナシの派生形容詞

各論篇

第一章 形容詞の対義語

形容詞語彙の語構成と通時的構造(安部)

第一節 多少と大小 第二節 ヒロシ「広」とサシ「狭」・セバシ「狭」 補節 一音節被覆形―露出形のアクセント

第二章 両活用形容詞の周辺

第一節 フトシ「シク活用」の成立 第二節 ウマシクニとウマシククニ 第三節 セバシ「シク活用」の有無

第三章 重複形容詞の周辺

第一節 重複形容詞と単独の形容詞 第二節 形容詞スガシ「清」の成立 第三節 ク活用形容詞群の重複・並列から

第四章 形態上の特徴を持つ形容詞

第一節 語幹末がイ列のク活用形容詞 第二節 一音節語幹の形容詞

中でも、総論篇第一章第二節は、語幹用法に限定されているものの形容詞語構成の通時的段階性が解明されており、同じく総論篇の第一章第四節は、上代語形容詞の語構成の共時的全容が体系的に整理されていて、語構成の研究史上画期的な業績と言えよう。それらを支えているのが総論篇の第二章と各論篇であり、また先行する蜂矢氏の次の前書(一)と(二)である。本書でのこの略称を本稿でも便宜上踏襲する。

前書(一)『国語重複語の語構成論的研究』(1998、4、塙書房)

前書(二)『国語派生語の語構成論的研究』(2010、3、塙書房)

なお、若い研究者の方々や大学院生などは、一つ一つの章・節毎に、綿密な調査や膨大な先行研究との丁寧で真摯な照合作業や、また、それらを各論篇と総論篇として組み上げていく高い構成員力を学び取ることであろう。縦横に行き来する行論は時に複雑に映ることがあっても、各篇や各章の導入部でのわかりやすい要旨的解説や、章や節の末尾での簡潔なまとめが理解を助けてくれる。そのような理想的手本の論文の書き方や丁寧な論述のスタイルをも、本書から習得できることであらう。

以下、各篇・章・節毎に、各内容を図表化させ、簡略な説明を付す。なお、本稿で図表を作成しなかった章や節の番号と題名は飛ばしてある(右記の蜂矢氏の目次と照合のこと)。また、書評的なコメントは、安部(2017.8)の前稿書評をご参照戴ければ幸いである。

三 総論篇

三―一 第一章 「形容詞の活用等と語構成」

総論篇は、古代形容詞の語構成についてその全体像の解明を企図し、本書の中核をなす到達点である。

第一章の「第二節形容詞語幹の用法」は個人的には最も注目された論の1つである。語幹用法の先行研究での分類を更に詳細に再検討した上で、最終的に――全体像としてはおそらく初めて――史的発展過程を解明している。

前半の16頁の語幹用法の整理(Ⅰ～Ⅵ)と後半36・37頁での(a)～(c)のク・シク活用による整理、史的位置

表 1 総論第一章第二節 「形容詞語幹の用法」と通時的発展段階

発展段階	(a) 「一次のない本来的用法」												
	I			II			III			IV			
品詞的用法	名詞的に			副詞的に			形容詞として			連体修飾語として			
下位分類	1	2	3	1	2	3	4	1	1	2	1	2	
用法	単独で	体言として	形容詞語幹と合して	単独で	用言に接して	ニを伴って(接頭語等+語幹+二・ノ)型	重ね用いて	重ね用いて	体言に接して	助詞・ツを伴って	感動詞と共に	名詞の要素として	動詞の要素として
語例	白	腰紐	遅速オソハレ	モトナ	太敷ク	イヤ高ニ	高々ニ	長水ソ夜	遠山・丸ナシ妹	高ツ鳥(・遠ノ朝廷)	アナ鹽ク	無サ・置ソク	壇△・カナツテ=上代(△ム・△フ)、中古(△ガル)
ク活用	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シク活用	/	/	/	(△? 「(b) か～検討する必要がある」という)	/	/	/	/	△限定的(上代は1語)	△限定的(上代は1語)	○	○	○

付けとの相互関係は(記号分類が二重になっていることもあり)、まとめた一覧のようなものがないと一読だけでは直ぐには分かりにくいので、◆表1を作成した。

形容詞の語幹とそれが文法的働き(意味も含めての機能)と形態(語構成)とが絡みながら、かつ活用も関係しつつ発展して来た様を描きだされている。a が本来的用法、b が次の段階、c はシク活用形容詞語幹の用法が発達した段階、3つの段階を経ているとする。

この◆表1は、前稿書評で掲載した形式であるが(一部修正)、この第二節での分析は実際にはさらに詳細である。その詳細な分類や段階性も、語幹用法および形容詞語形の発展を考えていく上で重要である。本稿で◆表2として、

詳細版を提示しておく。

第一章の「第四節 語構成から見た上代の形容詞」では、上代の形容詞全体（上代と「平安第一期」を「語構成」の観点から分類し、語形一覧として提示されている。対象範囲に一定の基準（年代や資料等）を設け、「上代」という共時態における形容詞語構成が、全体像としては初めてと言える広範囲さで、先行研究を整理し直した上で、体系的に明らかにされている。本書の大きな成果の1つである。この節での一覧を基本リストとして、今後の研究が積み上げられることになろう。

なお、語幹用法の通時的発展と、第四節に列挙された実際の形容詞としての語構成の各ボタンとの間に、何か通時的関連性や語構成上の連動する何らかの傾向はないのかなど、この2つの分類をつなぎ掛け合わせて考察する視点は次の課題へと発展するだろう。そのあたりは、むしろ蜂矢氏が続編として構想されておられるかもしれないが。

三―二 第二章 「特徴ある形容詞群」

第二節「重複形容詞・並列形容詞」は、重複形容詞の「準独立要素の重複、名詞の重複、副詞の重複」が論じられている。重複素の末尾音の各々の偏りにについても、準独立の要素の重複（ク活用形容詞語幹の重複を含む）では、ア・ウ・オ列（非狭母音）に多く、一方、動詞連用形の末尾音はイ・エ列であるゆえにその重複形容詞の末尾音はイ・エ列になるという。相補分布（ア・ウ・オ対イ・エ）的傾向という興味深い指摘である。

さらに、各重複素による重複形容詞と、重複したものがナリを伴った重複形容動詞とを比較している。『源氏物語』の場合に限定してではあるが、名詞、準独立的要素、動詞連用形では重複形容動詞もあるものの、副詞の重複では重

(b) 「次の段階」			(c) 「シク活用形容詞語幹の用法が発達した段階」						
IV		IV'	V	VI					
連体修飾語として【I1②に類似すると見れば「名詞的に」単独で」とも言えるか】		副詞的に	文末に	語の構成要素として					
1【I1の2に做えばIV2か】	2【I1の1に做えばIV1か】	(安部案IV2としてII3③から移動)	1	1	【1'】※ク活用へから別に立項する	2			
体言に接して【「体言と合して」とも言えるか？】		助詞ノ・ツを伴って【I1で「ノ」を伴う例も含んでいる点か】	(助詞ニを伴って)	感動詞と共に	名詞の要素として	動詞の要素として			
	ツを伴って	ノを伴って	(ニを伴って)	アナ～を伴って	接尾辞サ・ラ・ミを伴って名詞化	※【接尾辞ミを伴って法+音便形の用法】(ク活用形容詞語幹に偏る)	①動詞接尾辞を伴うもの	②動詞接尾辞を伴うもの	③動詞接尾辞を伴うもの
青山・深江、[シク活]サカシ女、ハシ女、	遠つ人	遠の朝廷・オツの宮人、[シク活]イカシの御世	マロ(丸)に、ユルタケに、	あな醜・あなタツツ	無さ・賢しら	カロンザ・ウトモンザ、[シク活用]イヤシんず	荒ブ、[シク活用]悲シブ、	憎ム・体ム、[シク活用]シム	暗ガ、活シ、怪ガ、
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
△限定的	/	△限定的=上代は1例(シク活用語幹は「イカシの御世」のみが確例)	/	○	○	△(イヤシんずのみはク活用に偏る)	○	○	○
上代	上代	上代	中古	上代	上代	上代	上代	上代	中古
			※下記注記参照(次頁)	アナタツツは[アナ+シク活用形容詞語幹]	「サ語法(橋本)接尾辞ミ=ミ語法、接尾辞(サシラ)・形容詞語幹、接尾辞ゲ=形容詞語幹、(*)	音便形は漢文訓読特有語か。	上二段動詞起源	四段動詞および上二段動詞起源	

表2 〔詳細版〕第一章第二節 「形容詞語幹の用法」と通時的発展段階

p26の まとめ	(a) 「一次的ないし本来的用法」												
大分類	I					II					III		
品詞的 用法	名詞的に					副詞的に					形容 詞として		
峰矢氏 の下位 分類 (16頁)	1	2	3	1	2	3	4	1					
用法	単独で(ノを伴う例を含む)		体言と合して	形容詞語幹と合して	単独で	用言にて接して	ニを伴って(ノを伴う例を含む)【①②から見て「接頭辞」と「ニ・ノを伴って」との組合せになるか。(接頭辞の付かないcf. IV 2参照)】		重ね用いて		重ね用いて		
*細分化	① 単独	②ノを伴って【IV 2の分類から見れば「連体修飾語として」「助詞ノを伴って」という分類にもなるか】					① [接頭辞イヤ(弥)・マ(真)・ヤ(真)・サ+形容詞語幹] +ノとして	② [接頭辞(マ) +形容詞語幹] +ノとして	[中古] ※ ③ [形容詞語幹+ニを伴って]【重複の単独】	【重複+ニ+ト】			
代表例	晝、近	若の、辛の	腰紐	遅速オソハヤ	オトナ、ハヤ	高知る、高敷く	いや高に、ま直に、やや大に、さくにあ	高に、ま直に、やや大に、さくにあ	マ(丸)に、ユルに、ユタケに、	【すぶぶぶ1例】	高高に	長と、広と、	遠し、長し
ク活用形容詞語幹	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シク活用形容詞語幹	/	/	/	/	(△?)	/	/	/	/	/	/	/	/
時代(提示事例の初出時期)	上代	上代	上代	上代	上代	上代	上代	上代	中古	上代	上代	中古	上代
品詞的用法			[名詞+形容詞語幹] = 名詞、あるいは、情感副詞語幹	[形容詞語幹+形容詞語幹] = 名詞、情感副詞語幹 or 形容詞語幹			[イヤ+形容詞語幹+ニ] = 情感副詞、形容詞		※ 下記参照(次頁)				シク活用形容詞

形容詞語彙の語構成と通時的構造 (安部)

(b) 「次の段階」		(c) 「シク活用形容詞語幹の用法が発達した段階」						
IV		IV'	V	VI				
連体修飾語として【I 1 ②】に類似すると見れば「名詞的に」「単独で」とも言えるか]		副詞的に	文末に	語の構成要素として				
青山・深 江、サカ シハシ女、 ハシ女、	遠の朝 廷のソ 宮人 [シク活 イカシ活 イ御世]	記: 究 注行 係 の関 II とで、 3 と明し 説 るは、 げ と、し 中 ささ 古 る接 中 の例 古 のあ 代 III の 置 く部 か (安)	あな醜・ あなタツ クツシ	無さ・旨 らみ・無 み・難 み・面 活]シト シシト・ ジミ・賢 シみ・麗 アカシみ	アウオ オカス・ ミズ・サ ズ・ナ ムンム ムヤサ ミヤサ ミヤサ ミヤサ ミヤサ ミヤサ ミヤサ	荒ブ・ [シク活 用]シ シブ、	憧ム・休 ム・恥シ ム、[シク 活]用]ヲ シム	暗ガ、 [シク用] シ用]ガ ル、怪 ガ、ル、 シ

重複形容詞がなく、重複形容詞よりも「重複形容詞の構成功の強さ」を表している」と位置付ける(傍線及び太字強調は引用者、以下同じ) ◆表4参照。

第三節「ナシ型形容詞」は、語末にナシを持つ2種類、即ち、「ナシ」[「無」型形容詞]と、「甚しい」の意味を持つ「ナシ」[「甚」型形容詞]の2類について、◆表5のような相違が確認されている。

第五節「ケシ型形容詞」は、「カーケシ」の対応を持つものの「||」[「一次的ケシ型」、「(カーケシ)」その対応を持たないもの]「||」[「二次的ケシ型」と分類し、さらに、前者のうち「カを末尾に持つものが形容動詞ではなく形容詞語幹であるもの」||「準一次的ケシ型」とする。その上で、一次的ケシ型は上代からあるのに対して、あとの2つは平安時代以降の例だけであるという通時的相違を説明している。その3類の特徴をまとめると◆表6のようになる。

第六節「ジ型形容詞」では、末尾にジを持つ「ジ型形容詞」2種——「ジ」[「否定」型形容詞]と「ジ」[「濁音化」型形容詞]——を、◆表7のように説明している。

p26の まとめ	(a) 「一次的ないし本来的用法」																			
大分類	I					II					III									
品詞的 用法	名詞的に					副詞的に					形容詞として									
上代の 具体例 (正も 含む)	〔ノ 伴が い 近、	を例 多青 若安 長の	辛の、 軽の、 高の	日高 白の 広の に	(地 根葉 の、 股長 =+ 語名) 【[名 詞語 幹] = + 語名) [主 述語] の 関係 クエ (人名)、	〔オ トヤ カヤ カス トガ 長〕	ソハ もヤ カヤ ナ 遠に	モト ナ、 ハ、 タ、 ヤ、 オソ オソ たも のに 挙げ られ る」 とあ るが 、「単 独で 」は ない こと は注 意が 必要 (24 頁)】	ナ、 ハ、 タ、 ヤ、 オソ オソ のよ うな よう なか ら、 「イ タ・ オソ 」も 形容 詞語 幹が 副詞 として 用い られ 「全 て」 は注 意が 必要 (24 頁)】	ヤ オモ よう なか ら、 「イ タ・ オソ 」も 形容 詞語 幹が 副詞 として 用い られ 「全 て」 は注 意が 必要 (24 頁)】	高知 ル、 太知 ル、 高敷 、グ フ、 早ソ ク、 (食 ソク 、退)	〔サ 容幹〕 + アル (>ナル)	形語 ニ + リ (ナル)	〔マ 容幹〕 + ノ	※：先 行研 究と 係二 三で 説明 され るが 、接 頭辞 なく 中例 でも の、 IV 2 がか よい か(安 部)					遠し、 長し

第八節「動詞被覆形+シの派生形容詞」では、◆表8のような語構成と通時的特徴が見事に説明されている。二段動詞と四段動詞の「被覆形容詞+シの派生形容詞」の段階的展開がここまで解明されてくると、これらと二段・四段の「動詞連用形+シの派生形容詞」の方の例とも照合して、意味や通時的な関係を探ってみたいと思われてくる興味深い成果である。

四 各論篇

四一 各論篇 第一章

各論篇は、総論を構築する上での基礎になっている。総論にも組み込まれている両活用形容詞の語形、重複形容詞・並列形容詞に関するところ、一音節語幹の形容詞、語幹末音の問題、意味的幅があることが複雑な類義・対義関係を生んでいる語群（大小、広狭の意）などの主要な諸現象を、詳細に考察している。

表 3 重複形容詞の重複素の末尾音

◆重複素の末尾音の相補分布的傾向ア・ウ・オ対イ・エ)	
1 準独立的要素の重複 (ク活用形容詞語幹の重複を含む) =ア・ウ・オ列 (非狭母音) に多い	
2 動詞連用形の末尾音	=イ・エ列 (狭母音)

表 4 総論第二章第二節 重複の「構成力」

重複の「構成力」	重複形容詞・重複形容動詞 (『源氏物語』の場合、94 頁)			
構成力の傾向	名詞	準独立的要素	動詞連用形	副詞
重複形容詞	○	○	○	○
重複形容動詞	○	○	○	×

表 5 総論第二章第三節「ナシ型形容詞」

ナシ型形容詞の 2 類	語構成の基本的傾向	総論第一章第四節での分類・解説	少数の意味の語形成
ナシ [無] 型形容詞	名詞+ナシ	V (2) (ハ) 二・三音節名詞+ナシ (ク活用)	術 (便)・ナシ、心・ナシ
ナシ [甚] 型形容詞	準独立的要素+ナシ	V (1) (ハ) 二～四音節準独立的要素ナシ (ク活用)	スク・ナシ (少) 【スク<スコ (少シ) +甚シ】

表 6 総論第二章第五節 「ケシ型形容詞」

ケシ型形容詞	対応関係	時代		未然形ケ・已然形ケ (上代)	已然形ケレ	補助活用	「語幹+接尾辞ケ」 (望月氏)
一次的ケシ型形容詞	カーケシの対応を持つもの	上代	(a) カ型語幹と対応するもの、(b) ヤカ型語幹と対応するもの、(c) ラカ型語幹と対応するもの	×	×	和歌のみ	×
準一次的ケシ型形容詞	カを末尾に持つものか形容動詞ではなく形容詞語幹であるもの	中古以降	ミジケシ—ミジカシ	×	×		×
二次的ケシ型形容詞	カーケシの対応を持たないもの	中古以降	(1) 形容詞語幹+ケシ、(2) カ行下二段動詞未然形ないし連用形+シ、(3) その他	×	○	○	○

表 7 総論第二章第六節 ジ型形容詞

ジ型形容詞	語構成	時代	語例
ジ (否定) 型形容詞	名詞 (・代名詞) +シ	上代	トキジ・オナジ・オヤジ
ジ (濁音化) 型形容詞	動詞【末尾マ行】+シ	院政期以降 (濁音化の確例が)	イミジ・スサマジ

表 8 総論第二章第八節「動詞被覆形+シ型派生形容詞」

1) 《上代に多い》	二段動詞被覆形+シ (下二段がやや多い)	ク活用形容詞	3 音節
2)	二段動詞被覆形+シ (上二段がやや多い)	シク活用形容詞	3・4 音節中心 (3 音節が多く、5 音節は 1 語)
3) 《中古以降多い》	四段動詞被覆形+シ	シク活用形容詞 (～ハシ型、～マシ型多い)	4・5 音節中心 (4 音節以上多く、3 音節は少ない)

表 9 各論篇 第一章第一節 「形容詞の対義語「多少と大小」」

対義関係の語形	語法上の形態対応	意味・用法	意味分化から見た変遷 (安部整理)
(イ) オホシースコシ (本来のもの)	オホシースコシキ	多い+大きい⇔少ない+小さい [大の意はオホキ連体形に偏る (* 語幹や接辞用法での大に継承)]	(1) 基本対応 (多と大、少と小が未分化)
(ロ) 同 上	オホキ・ニースコシキ・(ニ)	程度大きい(多い)⇔程度小さい(少し)	(1) 未分化 (多と大、少と小未分化) (副詞など程度用法)
(ハ) 同 上	オホキ・ナリースコシキ・ナリ	(専ら) 大きい⇔小さい	3) 形容動詞での「大小」分化 (平安初期～)
(ニ) 同 上	オホシースコシ (副詞的用法)	おおよそ・総じて⇔少し	
(ホ) オホシースクナシ (新対応)	オホシースクナシ	現代語に残る「多い⇔少ない」 対応の分化 (←スコシの強調形スク甚シの形成)	2) 形容詞での「多少」分化 (上代～) (万葉一三九四)
(ヘ) 同 上	(オホシースクナシ) ⇒《語幹+名詞用法の共通性》語幹オホ+名詞—語幹スクナ+名詞	大きい⇔小さい (例「オホナムチースクナビコナ」)	1') 分化 (* 語幹用法での「大小」の継承)
(ト) 同 上	(◇)オホシースクナシ>スウナキ) ⇒《接頭的用法の共通性》オホキ・オホイースナキ・スナイ・準体法スナキ	大きい (偉大・尊い) ⇔小さい	1') 分化 (* 接頭的用法での「大小」の継承)
【新対応】 オホキイ—チヒサイ	オホキイ—チヒサイ	現代語に残る形容詞の「大小」の新対応 (鎌倉～)	4) 「大小」の新対応 (平安：チヒサン、鎌倉：オホキイ)

第一章の「形容詞の対義語」は、他の節が多く形態・活用・語構成等を主眼としたアプローチであるのに対して意味を中心にした章である。対義関係の非対称性(アンバランス)は形容詞に限らない課題ではあるが、しかし、情意的意味のシクに比して客観的な属性を表現する古代のク活用形容詞全体として見た場合は、実は一部の対義語の問題に留まらず、形態的体系上の特徴にもつながっている問題が、本章には内在している。

第一章の二つの節で取りあげられている「大小」「多少」および「広狭」は、そのような問題を孕んだ意味と形態が織りなす未解決の課題でもあった。その結論自体も興味深いものであったので、◆表9にて、本書の詳しい解説を簡明に示してみたい。

この対義語彙では、「オホシ(大多) — スコシ(小少)」の対応が「本来的対応」(意味的に大と多、小と少が未分化な段階が基本)であり、次にスコシの強調形としてのスクナシの形成によって「オホシ(多) — スクナシ(少)」の新対応が生まれ、さらに、大小関係は当初の「オオキナリ — スコシキナリ」の対応が、中世以降は「オオキイ — チイサイ」へと受け継がれたという。

「大小・多少」の対義関係の変遷 (略記)

- (1) 「オホシ(大多) — スコシ(小少)」
- (2) 「オホシ(多) — スクナシ(少)」
- (3) 「オオキナリ — スコシキナリ」(大小関係)
- (4) 「オオキイ — チイサイ」(大小関係) — 中世以降

これらの語法上の形態的対応関係や意味・用法を、より詳しく示すと◆表9のようになる。

四―二 各論篇 第二章「両活用形容詞の周辺」

第二章の「両活用形容詞の周辺」の部分は、前稿書評で大幅に短縮したので、ここでは表化はしていないが、短縮前の原稿にて記載させていただくことにする。

「第一節 フトシ〔シク活用〕の成立」では、祝詞の宮柱と共起して使われるフトシキタツ6例は「動詞フトシク〔太領〕」の例であること、それが中世の和歌・歌謡に取り込まれて(宮)柱と共に使用されつつフトシクタテの形も取るようになったこと、シクともなったもう1つの背景には中世に漢字「敷」が動詞シク(敷・領・頻)およびシク活用形容詞語尾の表記に用いられシクとも読まれていたことも影響し、「ここにシク活用形容詞〔太〕が成立した」(338頁)と結論付ける。漢字「敷」の使用、動詞として用例の博探、歌での柱に限定された意味的偏りの照合など、丁寧な事例の積み重ねで解明されてある。用例の博探は、「六」における、現代語(昭和60年)の例である薬師寺三蔵院絵殿の上棟式での棟梁作の祝詞の「写真」から、やはり柱について「祝詞」で一千数百年間生きていることを示したところにも、その調査力の真骨頂が現われている。

このような現代語での検証でも、「因みに」とあり次いでの記事のことに映るやもしれないが、常に全時代の掌握を意識を向けている故の見事な追加例である。(なお、最初は存在しなかった「シク活用」をも許容していく意味的背景として、宮柱や祝詞のもつ畏敬的な情意面が、主観的シク活用ゆえに許容されたのではないかという側面も、考えたくなった。)

「第二節 ウマシクニとウマシキクニ」では、万葉の「怜(心十可)国曾」をウマシ・ウマシキ(クニソ)のいず

れで読み得るか、その根拠として従来言われている竹取の「ウマシキ世に」は「活用した」例としては異本もある孤例となるゆえに採用し難く、ク活用と見ておくのが確実と論証する。その竹取のウマシキ（世）が譬え異本であつても生まれ得る理由までも目を向け、上代のシク活用形容詞語幹用法があること（語幹が一音節で3語、二音節でも3語形。ウマシはウマシアシカビヒコジノカミがある）まで発生要因を考える目配りの広さは、論者が、常にあらゆる可能性を意識し掌握していることの現れである。

「第三節 セバシ〔シク活用〕の有無」では、確例としてのセバシ（シク）の例はないと結論付ける。

この章の三つの節に限らないことであるが、どのような背景によってその語形、活用、例外、孤例が発生するのかということが緻密に調査され考察されている。その発想力の柔軟性は習得したくとも真似の出来ない見事な「技術」である。

四―三 各論篇 第三章「重複形容詞の周辺」

第三章の「重複形容詞の周辺」は総論篇第二章を補充する章であり、また、重複を扱った前書（一）に連なるテーマでもあるだけに解析は詳密である。

第一節「重複形容詞と単独の形容詞」は、それを文字で解説すると長くなり、かつ、複雑で全貌を鳥瞰しにくいので、ここも◆表10および◆表11にまとめた。本節は、語構成からの分類も見事であるが、それと通時的変遷を関連づけて体系的に位置付け、その形成の史的段階を説明した点が大きな成果である。

重複形容詞 a y e は、重複形容詞と対応するその単独形容詞も共に上代・中古に見えるもの（つまり「古代的重複

形成形式」である。

それに対して、重複形容詞 f ~ i は、対応する単独のシク活用形容詞が中世以降（2語だけが鎌倉、その他のほとんどは室町以降）に現れるものである。後者は「重複形容詞から単独の形容詞が、基本的に室町時代以降に、言わば二次的に形成」とする。

評者などは、そこに「重複形容詞の形成法に（も！）、古代語とおよそ中世半ば以降の近代語との間での明瞭な境界がある」と読み取った点である。

なお、274頁の五節では、「これまでに見てきた対応を改めて整理することにした。」として、重複形容詞形と対応する単独形容詞とを、アルファベットで整理しなおしている。しかし、「(3) 動詞連用形の重複」の分類がないのは重複形容詞（ワキワキシ等）に対応する単独形がないゆえであることはわかるが、「(4) 副詞の重複形」（ウベウベシ―ウベシの対があるのでは？）に相当する分類が、脱落している。何か理由があるのだろうか。

ところで、大局的にはその解釈に抵触しないものの、些末な点ながら、後発の重複形容詞とは直接は無関係に、あるいはその影響だけではなく、その先行するク活用形容詞の方から、ないし、ただ独自に、シク活用形容詞が発生した場合もあり得るのではないか、という場合（事例）のことが、いささか気にかかった。

それに該当するシク活用3語形「ウマシ・サムシ・フトシ」とその重複形容詞「ウマウマシ、サムザムシ、フトブトシ」（84頁）には、a ~ i 類の分類が割り振られていないから、余計その存在がそこでは陰に隠れてしまっているように見えた。安部（2017, 8）で少し触れたが紙幅がなかったので、改めて少し詳しく記しておく。

h・i のシク活用形容詞は、その前にク活用も持つものである。ク活用形も重複形も共に先行しているとなれば、

表 10 各論第三章第一節 「重複形容詞と単独の形容詞」（一部未整理枠を含む）

重複形の通時的観点	分類Ⅱ (p. 274)	分類Ⅰ 語構成 (総論)		単独形の活用	語形数 (分類上の語形)	例 ないし、対応関係 単独	対応関係 重複
(1) 上代・中古	a	(1) 準独立要素の重複	(イ) ク活用形容詞語幹の重複	ク活	多数	◎多数 (約 30 語) ナガシ	ナガナガシ
(1) 上代・中古	a'	同上	(セハシ<セバシの子音交替形)	ク活	(1 語セハシ)	セハシ (セハシはシク活用)	セハセハシ (セバ~の子音交替形)
(1) 上代・中古	b	同上	(ロ) シク活用形容詞語基の重複	シク活	少ない	サカシ (単独形の用例が多数) >	サカサカシ (重複形の用例数が僅か)、ほかサガサガシ、トモトモシ
(1) 上代・中古	c	同上	同上	シク活	(1 語ナマシ)	ナマシ (単独形の用例数が少数) <	ナマナマシ (単独形の方が用例数なし)
(1) 上代・中古	d	(特に重複形成を分類せず、個別例として検討のみ?)	「単独の形容詞に近似したもの」《シの前部分を語幹・語基と見ての重複?》	シク活	(3 語)	スガシ女、アダシ波、タギシミミ、	スガスガシ、アダアダシ、タギタギシ
(平安第一期?)	(分類ナシ?)	(1) 準独立要素の重複	(ハ) その他の重複 (キラキラシ)			キラ端正	キラキラシ
(1) 中古	e	(2) 名詞の重複	《(1) の(ロ)「シク活用形容詞語「基」の重複」とも言えるもの。》	シク活	やや多い (シク活用形容詞語基の重複とも言える)	ヲサシ長、オトナシ (<大人ナシ)、ヲシ雄	ヲサヲサシ、オトナオトナシ、ヲヲシ、
【比較参照】		参考 (名詞の重複による形容詞の偏り)	「ク活用形容詞語基の重複」の限定性	ク活	主に色彩形容詞語幹 (地名人名のナガ長、ワカ若、カル軽 (19 頁) は「準独立要素」とここではしている (263 頁)。	クロシ、シロシ、アヲシ、アカシ	重複ナシか? (×クログロシ、シロジロシ、アヲアヲシ、アカアカシ。但し、シラジラシ有)

形容詞語彙の語構成と通時的構造 (安部)

	(分類ナシ?)	(両活用形容詞のうちの3語形)	ウマシ、フトシ、サムシ (注①⇒)	シク活	注① (ウマシ(シク) = 第二章第二節、フトシ(シク) = 第二章第一節、サムシ(シク) = 総論第二章第一節、参照)	[両活用のうちシク活用] ウマシ(シク)、サムシ(シク)、フトシ(シク)	ウマウマシ、サムザムシ、フトフトシ
(2) (重複が中古、単独が室町以降) 重複から単独が二次的派生	f	(2) 名詞の重複	準独立的要素の重複	シク活		マメシ	マメマメシ
(2) (重複が中古、単独が鎌倉) 重複から単独が二次的派生	f'	(2) 名詞の重複	(字音語の例) 準独立的要素の重複	シク活		ゲスシ (鎌倉)	ゲスゲスシ (中古)
(2) (重複が中古、単独が室町以降) 重複から単独が二次的派生	g	(2) 名詞の重複		シク活		ハカシ、ナサケシ	ハカバカシ、ナサケナサケシ
(2) 平安初期		(3) 動詞連用形の重複			上代に例なく、古い時代の例は少ない (基本的に、重複素は2音節)	(ワク四段、ツギツ次)	ワキワキシ・ツギテツギテシ
(1) 中古ウベウベシ、 (2) 中世ゲニゲニシ	注② ⇒	(4) 副詞の重複	(* 和語の副詞の重複で、単独形との対があるのはウベシのみか? 94頁)	シク活	少ない 注② (274頁5節では副詞の重複形の分類が脱落か?)	ウベシ (記仁徳)、× (ゲニシ無し)	ウベウベシ (枕草子)
(2) (重複が中古、シク単独が室町以降) 重複からシク単独が二次的派生	h	(1) 準独立的要素の重複	(a) ク活用形容詞語幹の重複/同 (b) シク活用形容詞語基の重複	ク活	5語形	フルシ(ク)(シク活用が二次的に派生)	フルブルシ
(3) (重複は室町以降、シク単独も室町以降) 注③⇒	i	(1) 準独立的要素の重複	(a) ク活用形容詞語幹の重複/同 (b) シク活用形容詞語基の重複	ク活	4語形 注③ (重複からシク単独が二次的派生(ナホシは鎌倉))	フカシ(ク)(シク活用が二次的に派生)	フカブカシ
その他	その他	字音語の重複					ラウラウシ

表 11 各論篇第三章第一節 「重複形容詞と単独の形容詞」

——「両活用形容詞のシク活用」と「重複形容詞（シク活用）」

「両活用形容詞のシク活用」と「重複形容詞（シク活用）」との前後関係	分類 (274 頁)	I	II	III	語例
(1) 重複形容詞もそれと対応する単独の形容詞等も、基本的に上代・中古に既に見られるもの（前後関係未詳）	a ~ e	（両方が既に上代・中古にあり、前後関係未詳）			ナガナガシほか
(2) 重複形容詞から単独のシク活用形容詞が形成された場合	f ~ i	（ク活用形容詞が先行する場合しない場合）	重複形容詞（シク活用）	シク活用形容詞（基本的に室町時代以降、重複形容詞から二次的に形成された）	マメマメシ、フルフルシ、フカブカシ等
(3) 両活用形容詞のうち単独シク活用形容詞の形成が、重複形容詞より古く、単独のク活用ないし独自にシク活用形容詞が派生したものの	「重複形容詞の例より両活用形容詞のシク活用のものの方が古く、重複形容詞から両活用形容詞のシク活用のもので形成されたとは考えられない。」(84 頁)	ク活用形容詞	シク活用形容詞	重複形容詞（シク活用）	ウマウマシ、サムザムシ、フトフトシ<ウマシ・サムシ・フトシ
(4) 単独シク活用形容詞の形成は、単独ク活用形容詞および重複形容詞の発生後であり、どちらの影響か確定し難い場合		ク活用形容詞	重複形容詞（シク活用）	単独のシク活用形容詞	

形容詞語彙の語構成と通時的構造（安部）

一方のみの影響とするのは難しくはないか。解釈で根拠としている類似現象の時代的近さと、重複形容詞が（も）先行している点は認めるものの、単なる独自の発生や、ク活用の影響が皆無と言いきれるかどうか、やや気になった。

実際にも、「重複形容詞の例より両活用形容詞のシク活用のものの方が古く、重複形容詞から両活用形容詞のシク活用のもので形成されたとは考えられない。」(84 頁) 事例も、論者自身が挙げている（ウマウマシ、サムザムシ、フトフトシ）。それらについては、「これらの両活用形容詞のシク活用ものは、それぞれ重複形容詞より古い例であるので、重複形容詞から両活用形容詞のシク活用のもので形成されるととらえることはできないからである。」(274 頁) とあるように、重複形容詞が出現しな

い段階で、シク活用のものが形成されているのだから、これらでは派生関係の順序は明瞭である。重要な点は、ク活用から（重複形容詞がなくても）、両活用形容詞のシク活用が生まれ得るといふ点である。

「gは（中略）、単独のシク活用形容詞が見える時代は f h と同様であって、その形成は f h と同様であると見られよう。」（275頁）とあり、時代という点から「形成」も f・h 同様とし、さらに i も「その形成は h と同様であると見てよいであろう。」とするが、この推論の大元の g（ハカシ、ナサケシ）は、元々ク活用形容詞はなく、重複形からしかシク活用が発生し得ない例である。それらを根拠に、ク活用形容詞も重複形容詞も共に既にある事例に推論を拡大させている、ようにもみえた箇所である（あるいは説明の続き方による読解の印象の問題で単なる誤解であろうか）。

慎重な論者であるだけにそのあたりへのコメントがあってもよいかとも思われた。特に、情意的意味合いも汲み取れる h のウトシ、i のタケシ等の場合には、特にその情意的意味ゆえに、自ずとシク活用化が選択された可能性も否定できないように思われた。

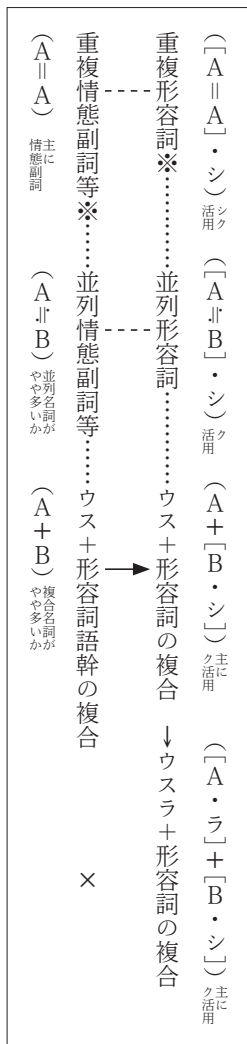
フルシ（古）（ク活用、万葉）―フルブルシ（シク活用、枕草子）―フルシ（シク活用、蒙求抄）

★ウトシ（疎）（ク活用、【琴歌譜（9C前）】《安部確認》）―ウトウトシ（シク活用、蜻蛉・宇津保）―ウトシ（シク活用、評判記）

★タケシ（猛）（ク活用、【万葉】《安部確認》）―タケタケシ（シク活用、太平記）―タケシ（シク活用、類聚音義）

【*ウトシ（ク活用）、タケシ（ク活用）の古代例の例示が本書に無いようなので（索引からは例示箇所をたどれなかった）、そのことなども、解釈に影響したか。本書では、ほとんどすべての語形の上代語形例や初出語形例が具体的に用例と共に示されているのであるが、これらウトシ・タケシは、本書の索引からはク活用の古例例示箇所が探せない

表 12 重複形容詞・並列形容詞から「ウス複合形」「ウスラ複合形」への展開



かったものである。】

第三節の「ク活用形容詞語幹の重複・並列から」では、「重複形容詞―並列形容詞―重複情態副詞等―並列情態副詞」等と共に「ウス+形容詞語幹の複合↓ウス+形容詞の複合↓ウスラ+形容詞の複合」という通時的変遷がここでも説明されている。

これらの形容詞の史的展開とその意味・語法の段階性という次なるテーマを与えてくれている。この節では、珍しく変遷図（308頁）にまとめられているが、それを◆表12として、転載しておく。

五 おわりに

本稿では、蜂矢氏の形容詞の語構成研究を、執筆者の個人的視点から整理し視覚化、「見える化」してみたものである。

意図したところは、一つには、語構成史研究の現時点での最先端の研究成果を、共有し、議論をより活発化させるためである。いま一つには、前稿書評で紹介できなかった部分を紹介させていただくためであった。また、個人的には、本稿執筆者自身の形容詞の語彙・語構成の研究を、再度、整理していくためであり、書評の補足版として記したものとなる。

表2や表9のように、細かい点まで書き出してしまったために、わかりやすく示すための図解・図表というよりも、整理のための安部の手控えにしかすぎないといったような、かえって複雑な状態のものもある。また、前稿書評執筆過程でのメモの手控え図を元に作成したため、思わぬ誤記載が残っている可能性を恐れるが、その点は御海容の上、原本と照合して確認を取っていたできれば幸いである。

形容詞の語構成史は、本書でも、すべて通時的に全体が完全に記述されているわけではなく、前稿書評や本稿でも触れたように、例えば、総論篇第一章第二節の「語幹用法」の段階性の問題と、実際の形容詞語形の通時的形成の照合作業など、今後の検討が必要な部分や、中世以降細部の記述などがまだ残っている。

本書を基礎として語構成史研究がさらに飛躍的に発展していくこととなるだろう。本稿の拙い図表と紹介が多少ともそれに資するところがあれば幸いである。

【注】

(注1) 本稿は、当初、安部清哉(2017:8)「書評」蜂矢貞郷氏『古代語形容詞の研究』(『萬葉』224)の執筆過程で手控えに整

理した図表である。前稿書評の紙幅制約上、掲載が適わなかったものである（◆表1を除く）。ここに、書評の補足的資料という意味もこめて編んだが、研究としては次の意図による。

蜂矢氏の右書での本研究は、形容詞語構成（史）研究としても重要であるが、一方、文字のみでの解説はそれが詳細であるだけに、体系的な全体的把握には（形容詞に特に向き合っていない語彙研究者ほかには）時間と労力を要する部分もある。多少なりとも図表の形で、諸要素とその分類観点や術語等が、箇条書き的に示されているだけでも、理解の助けになるだろうと考え、手控えの公表を考えたものである。（個人的には図表の方が把握しやすいという備忘の意味もある。）

図表の細部の体系化や説明語句の表現などは、もっと時間をかけて整理し、より分かりやすくすべきものがあると思う。また、未整理で必ずしも蜂矢氏の意図通りの記載でない部分や、理解不足・誤記が紛れている可能性もある。それらは原本と照応して補っていただければ幸いである。

（注2）前稿書評・安部（2017.8）に次の誤記があるので訂正いたします。

78頁 上段左から7行目

正（総論第一章第四節） ↑ 誤（総論第四章）

正（同 第一章第二節） ↑ 誤（第二章）

修正した冒頭部分は、以下の通りとなる。

一 はじめに

語構成の歴史はどのように描き得るか。本書は、形容詞に限定して、一品詞、全体の語構成史を初めて解明した、研究史に残る一書である。

多くの日本語史研究者が待ち望んだ書でもある。特にその総論篇の共時的分類（総論第一章第四節）と語幹用法の通時的構造（総論第一章第二節）が、今の語構成（史）研究の到達点を示している。それらは本書各論篇および論者（以下、本書著者を指す）の、先行する研究書での緻密な実証の裏付けによって、論理的に構築されている。——以下略——

【参考文献】

- 蜂矢真郷 (1998) 『国語重複語の語構成論的研究』 塙書房 Ⅱ前書(一)
蜂矢真郷 (2010) 『国語派生語の語構成論的研究』 塙書房 Ⅱ前書(二)
蜂矢真郷 (2010) 『古代語の謎を解く』(阪大リーブル021) 大阪大学出版会、
蜂矢真郷 (2017) 『古代地名の国語学的研究』 和泉書院
- 工藤力男 (1999) 「書評 蜂矢真郷著『国語重複語の語構成論的研究』」『国語学』197
小柳智一 (2011) 「書評 蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』」『萬葉』209
山口佳紀 (2002) 「書評 蜂矢真郷著『国語重複語の語構成論的研究』」『萬葉』180
斎藤倫明 (2012) 「書評 蜂矢真郷著『国語派生語の語構成論的研究』」『日本語の研究』8-2
漆谷広樹 (2015.10) 「書評」蜂矢真郷著『古代語形容詞の研究』『日本語の研究』11-4
- 安部清哉 (2011.3a) 「形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相」『学習院大学文学部研究年報』57
安部清哉 (2011.3b) 「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立」『人文』9、学習院大学人文科学研究所以
安部清哉 (2014) 「名詞の変遷——通時的変化の諸相——」『品詞別学校文法講座第2巻』第8章、明治書院
安部清哉 (2016.3) 「音韻交替と文法的機能分化・意味分化——「破裂音・鼻音」(阻害音・共鳴音) 対応——」『学習院大学文学部研究年報』61
- 安部清哉 (2017) 「4.3 その他の語形変化」129頁、『日本語の音』朝倉書店
安部清哉 (2017.8) 「書評」蜂矢真郷氏『古代語形容詞の研究』『萬葉』224

